

女子大学生の飲酒行動に関する研究

大森 正英・山澤 和子・棚橋亜矢子・内田美佐子・高山 侑樹
東海学院大学 健康福祉学部 食健康栄養学科

【はじめに】

現代は、女性が酒を嗜んでもとやかく言われることのない時代になった。生活の質を高める手段が多様化し、選択の幅が広がることは望ましい傾向と言えよう。適度の飲酒は食欲を増進し、料理の味を引き立てるなどの効果があり、さらには健康増進における役割も注目されている。しかし、女性は一般にアルコール代謝能力が男性に比して低いとされ、その他にも飲酒に関しては生物学的、社会・文化的に種々の性差があるのは事実である。特に健康習慣の確立期にある女子大学生の無謀な飲酒行動は、健康に悪影響を及ぼすことが危惧される。本報告は、青年期女子大学生の飲酒をめぐる状況や食生活行動、ストレスとの関連などから、常習飲酒に関連する問題因子について検討したものである。

【方法】

調査対象者：G県下の4年制大学に在学する女子学生（18～24歳、154名）を対象とした。

調査時期：平成20年4月～24年6月

調査方法、内容：実習を伴う講義時に、授業の一環として調査用紙を配布し、自記式で回答を求めた。回答内容を自身で集計、分析する実習であるため、回収率は100%であった。調査内容はアルコールの摂取状況、飲酒の理由、自覚的健康度、自覚的ストレス度、食行動、喫煙状況、生活時間、身体状況など日常生活全般に関する調査項目からなる。

調査対象者の区分：日常の平均的な飲酒頻度により2群に分けた。飲酒頻度が1回/週以上のものを（女子大学生としては）「飲酒頻度が高い群」、これ以下の頻度のものを「飲酒頻度が低い群」とした。また、対象者のストレスの感じ方について、「相当のストレスがたまっていると感じる、ストレスがたまっていると感じる」と回答した群を「ストレスが多い群」、「少し感じる」と回答した群を「ストレスが少ない群」、「感じていない」と回答した群を「ストレスがない群」とした。

集計、分析は無記入、無回答、矛盾回答等を排除し、有効回答のみについて行ったため、各分析項目の対象人

数に若干の差が生じた。分析方法はt検定、Pearsonの χ^2 検定、Mann-WhitneyのU検定を用いた。

【結果と考察】

1. 酒類摂取状況（表1）

初めて飲酒した時期は大学時代と高校時代が約8割で、対象者の大半が高校時代までに飲酒を経験していることになる。その他、中学校時代、小学校時代の飲酒経験も少なくないところから、未成年飲酒がかなり含まれているものと思われる（表1-1）。

飲酒のきっかけとしては「付き合いで」と「好奇心から」としたものが多く、次いで両親の勧めの順であった（表1-2）。これらの割合が高いのは、飲酒に対して寛大な社会文化的風土が背景にあることによるものと思われる。

現在の飲酒状況は、「よく飲む」と答えた例は6.7%と少なかったが、付き合い程度に飲むものが71.4%もあり、飲酒行動が一般化している様子が窺える。全く飲まないものは21.9%であった（表1-3）。

主に飲む酒の種類は果実酒（梅酒など）が64.0%で多く、次いで、カクテル、ビールが多かった（表1-4）。一般成人と異なり、ウィスキーや日本酒を主に飲むと答えた例は少なかった。なお、ここでいう「カクテル」とはバーなどで提供される本格的なものではなく、ほとんどが「缶酎ハイ」などの「簡易カクテル」である。

付き合いで多量に飲酒することがあるか、という問いに対しては、半数近くが「付き合いで多量に飲酒することはない」と答えているものの、3割以上が「月1～2回ある」としており（表1-5）、大学時代において、仲間との付き合いの場で飲酒行動が定着化していくことが推察される。

飲酒頻度は「ほとんど飲まない」が過半数とはいえ、定期的に飲酒していると思われる例が13%を超えていることや、「飲む時は偏る」と答えているものが35%もいる（表1-6）ことから、この先（調査時以降）、飲酒の習慣化がますます進むことが予測される。これらの定期的な飲酒者を青山ら^{1, 2)}の分類による常習飲酒者（週4回以上の飲酒者）と習慣飲酒者（週1回以上3回以内の

飲酒者)に当てはめてみると、本研究の対象者においては常習飲酒者が1.9%、習慣飲酒者が11.3%いることになる。本研究における分類では「飲酒頻度が高い群」が13.2%、「飲酒頻度が低い群」が86.8%となる。

飲酒の理由(複数回答)については、「特に理由はないが飲みたいから飲む」、「気分転換のため」、「付き合いに必要なだから」と答えた例がほぼ同率を占めた。次いで多かったのは「酒の味が好きだから」で、「疲れを取る

表1 酒類摂取状況

1-1 初めて飲酒した時期

大学生の頃	20.5%
高校生の頃	58.2
中学生の頃	12.3
小学生の頃	5.5
飲酒経験なし	3.6

1-2 飲酒のきっかけ

付き合いで	43.6%
好奇心から	32.6
両親の勧め	14.7
パーティー・コンパ時に	4.1
その他	5.0

1-3 現在の飲酒状況

よく飲む	6.7%
付き合い程度	71.4
全く飲まない	21.9

1-4 主に何を飲むか(複数回答)

果実酒	64.0%
カクテル	33.2
ビール	24.2
焼酎	3.8
ワイン	3.8
ウイスキー	1.9
日本酒	1.2

1-5 付き合いで多量に飲酒することがあるか

毎日ある	0.5%
週1~2回ある	3.7
月1~2回ある	32.1
年1~2回ある	15.6
ほとんどない	48.2

1-6 飲酒の頻度

毎日飲む	0.5%
週4~6回	1.4
週2~3回	4.5
週1回	6.8
ほとんど飲まない	51.8
飲む時は偏る	35.0

1-7 飲酒の理由(複数回答)

飲みたいから飲む	40.1%
気分転換のため	38.7
付き合いに必要なだから	37.7
酒の味が好き	15.6
疲れを取るため	3.3
酔うため	3.8
食欲増進のため	0.9
大人だから	0.9

1-8 主な飲酒の場(複数回答)

自宅	29.7%
一杯飲み屋(居酒屋を含む)	59.4
友人・知人宅	19.3
下宿	3.8
スナック・バーなど	0.9
その他	4.2

1-9 この1週間で何日飲んだか

全く飲まなかった	72.6%
毎日飲んだ	1.3
4~6日飲んだ	2.7
2~3日飲んだ	7.6
1日飲んだ	15.7

1-10 一気飲みの経験

ある	32.8%
ない	67.2

ため、「酔うため」が3～4%近くみられた他（「食欲増進のため」、「大人だから飲むのは当然」）は極少数にとどまった（表1-7）。

主な飲酒の場（複数回答）（表1-8）は「自宅」、「友人・知人宅」、「下宿（アパート等を含む）」が合わせて52.8%あり、学生らしい金のかからない飲み方をしている例が多いことが分かる。しかし、「居酒屋を含む一杯飲み屋」での飲酒はこれら3者の合計よりもさらに多い（59.4%）。これは水野ら³⁾によるとファッション性などを重んじる女子大学生の特徴であるという。

この1週間で何日飲んだかという問いに対しては72.6%の対象者が「全く飲まなかった」と答えているものの、週4回以上および週1回以上3回以内の飲酒者は少なくなかった。これらは前述の青山らの分類1、2)に従えば常習飲酒者が4.0%、習慣飲酒者が23.3%いることになり、実際の飲酒頻度は表1-6に示されたものより少し高い可能性がある。

一気飲みの経験については32.8%が「ある」と答えており（表1-10）、これは後述する飲酒後の意識不明例と考え合わせると、大変憂慮すべき事態であると思われる。

2. 飲酒に関する意識（表2）

酒を飲むことが好きかどうか、についてみると「好き」と回答したものが「嫌い（『好きではない』を含む）」を上回っているが、「どちらとも言えない」という回答が45.9%ある（表2-1）。この結果は、本調査の対象者である大学生の飲酒経験の少なさを反映しているものと思われる。

大学生として酒を多く飲む方と思うか、あるいは少ない方だと思うか、という意識について尋ねたところ、「大学生としては多く飲む方である」と思っている例は少なく（8.2%）、過半数が「少ない方と思う」と答えている（表2-2）。飲酒習慣が定着している例はまだ少ないことを考慮すれば当然の結果と思われる。

飲酒後の心身の変化を複数回答でみると、全体の半数が「陽気で朗らかになる」としており、次いで「変わらない」、「眠くなる」の順であった。「意識が薄らぐ」、「乱暴になる」、「気が沈む」などの好ましくないと思われる変化を呈する例は幸いにして少なかった（表2-3）。

酒に対して強いと思うか、あるいは弱いと思うか、という問いに対しては「強いと思う」と「普通」の合計と「弱いと思う」がほぼ同数であった（表2-4）。これは後述する飲酒後の顔面紅潮現象との関連から判断すると、かなり正確な自己認識であると推察される。

飲酒後の顔面紅潮現象についてみると「赤くなる」と「少し赤くなる」を合わせて70%が顔面紅潮を体験している。これに対し、「変わらない」は約3割、ごく少数が「青くなる」と答えている。飲酒後の顔面紅潮現象は血中のアセトアルデヒドの濃度が高くなることによって生じる⁴⁾。飲酒後、アルコール（エチルアルコール）が代謝されて生じたアセトアルデヒドは、アルデヒド脱水素酵素により二酸化炭素と水とに分解されるが、日本人の約半数はアセトアルデヒド代謝能力の高いALDH2型（アルデヒド脱水素酵素2型）を欠損しているため、飲酒後、血中アセトアルデヒド濃度が容易に高まり、顔面紅潮を来す⁴⁾。今回、「赤くなる」、「少し赤くなる」と答えた学生の大半はALDH2型の欠損例であることが推察される。表2-4に示された結果は日本人のALDH2型欠損例の存在比⁴⁾からみて極めて妥当である。

興味深い事実として、筆者らの先行研究³⁾は、「酒に強いと思う」女子大学生の割合が男子学生より有意に多いことを報告している。（「酒に強い方だと思う」女子学生の割合は、本研究と先行研究でほぼ同じである。）ALDH2型欠損症の分布は男女間で差がない⁵⁾ので、女子学生の方が「酒に強い」と思っている人が多いのは、飲み方のペースや、酒を飲み慣れていないなどの理由によってもたらされたものと思われる。例えば、コンパなどで一緒に飲む機会があった場合、男子学生が青年期特有の気負いから、速いペースでより多くの飲酒をする結果、比較的ゆっくりしたペースで飲む女子学生よりも先に酔うことになり、その様子を観察した女子学生が「自分の方が酒に強い」と錯覚することは大いにあり得る。

二日酔いで学校を欠席・遅刻した経験は大半が「ない」と答えているが、「ある」と答えたものが8%近くいた（表2-6）。その多くは「たまにある」であるが、勉学に影響を与えていることが窺われ、大学生として望ましくないことではある。

友人や本人が一気飲みなどの後、意識不明になり、病院に運ばれたことがあるか、という質問に対し、ほとんどが「ない」と答えているが、「ある」と答えた学生が約8%存在した（表2-7）。この結果は、幸いにして例数は少ないものの、青年期女子の生活や健康状態に深刻な影響を及ぼしかねない重大事と認識すべきであろう。

学生生活に酒は必要か、という問いには「時に必要」が半数以上を占め、「必要と思う」と合わせて飲酒行動を肯定している学生が多かった。「必要でない」、「わからない」も4割以上の学生にみられるが、これらは今後、大学を卒業し社会人になるなどの経験を経ることにより変化していくことが考えられる。

表2 飲酒に関する意識

2-1 酒を飲むことが好きか

好き	30.6%
どちらとも言えない	45.9
嫌い	23.4

2-2 飲酒量は学生として多い方か

多く飲む方と思う	8.2%
普通と思う	18.3
少ない方と思う	64.8
ほとんど飲まない	8.7

2-3 飲酒後の心身の変化(複数回答)

陽気で朗らかになる	50.0%
眠くなる	25.0
意識が薄らぐ	7.1
気が大きくなる	2.3
乱暴になる	2.0
気が沈む	1.7
頭が冴える	0.8
変わらない	27.4

2-4 酒に対して強いと思うか

強いと思う	14.0%
普通	29.4
弱いと思う	42.5
わからない	14.0

2-5 飲酒後の顔面紅潮について

赤くなる	44.6%
少し赤くなる	25.4
変わらない	29.1
青くなる	0.9

2-6 二日酔いによる欠席・遅刻

よくある	0.9%
たまにある	6.7
ない	92.4

2-7 飲酒により自身や友人が意識不明になった経験

ある	7.7%
ない	88.2
わからない	4.1

2-8 学生生活に酒は必要と思うか

必要と思う	2.2%
時に必要	54.3
必要でない	16.6
わからない	26.9

表3 現在の健康状態

健康である	32.9%
普通	56.3
あまり良くない	7.2
悪い	0.9
わからない	2.7

表4 ストレスの状態

4-1 ストレスをどの程度感じているか

かなり感じている	23.9%
少し感じている	54.2
感じていない	21.9

4-2 ストレスの原因(複数回答)

学業	57.9%
就職関連	43.2
家族関係	25.3
友人関係	18.9
アルバイト先の問題	40.0
健康問題	22.1
その他	13.7

3. 現在の健康状態 (表 3)

現在における健康状態の自覚は「健康である」と「普通」が合計で90%近くであり、ほとんどの学生は「まあまあ健康である」と感じているようである。これに対し、「あまり良くない」、「悪い」と答えた例が8%を超え、さらに「わからない」と答えている学生も約3%いる。学生の健康問題を論じる際、こうした健康状態に問題のある学生の存在は、常に心しなくてはならないことであろう。

4. ストレスの状況 (表 4-1 および 4-2)

ストレスをどの程度感じているか、については「ストレスをかなり感じている (ストレスが多い群)」と「ストレスを少し感じている (ストレスが少ない群)」が合計で約8割あり、「ストレスを感じていない (ストレスがない群)」は約2割であった。すなわち、大半の対象者が何らかのストレスを感じていることになる。

ストレスの原因を複数回答でみると、学生らしく「学業」が約6割、「就職関連」が4割強あり、その他「家族関係」が約25%、「友人関係」が2割弱、「アルバイト先の問題」が4割であった。一般成人に多い「健康問

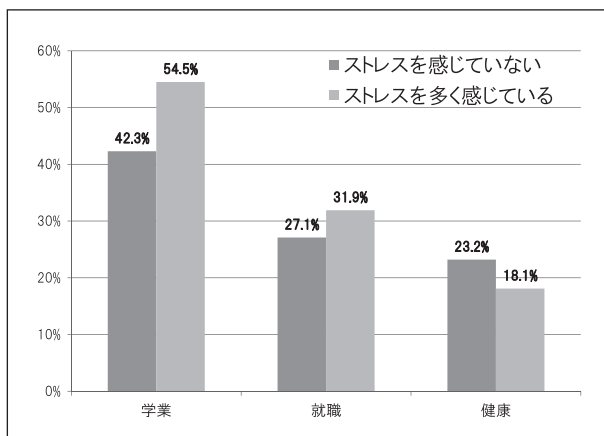


図1 ストレスの度合いとストレス源の関連

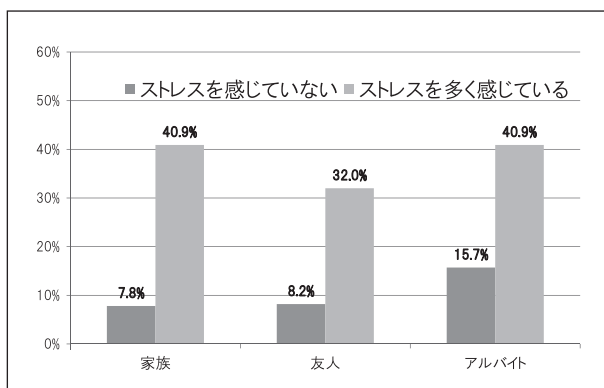


図2 ストレスの度合いとストレス源の関連

題」は20歳前後の学生にはさすがに少なく、2割強を占めるにとどまっていた (表 4-2)。大学生活における特徴的なストレスの原因が窺える。

5. ストレスの強さとストレス源との関連 (図 1, 2)

ストレス源としての学業、就職関連、健康問題について、ストレスを多く感じている群とストレスを感じていない群間の違いを図1に示した。これらのストレス源に関しては両群間の明確な違いは見られなかった。また、ストレスを感じていないはずの「ストレスがない群」でも学業や就職に関しては同じようにストレスを感じていることが分かる。すなわち、これらは大学生活に共通したストレス源であると思われる。これに対し、家族関係、友人関係、アルバイト先の問題についてみると両群間に著しい違いがあり (図2)、「ストレスが多い群」の方が有意に大きなストレスを感じている。この3種類のストレス源に関しては、いずれも2群間に有意の ($p < 0.05$) 差があった。これらのストレス源の特徴は、これらがいずれも人間関係のストレスに関係していることである。すなわち、「ストレスが多い群」はこうした人間関係に基づくストレスを強く、ストレスとして感じるために「ストレスを多く感じる」のであろうと推察される。一方、「ストレスがない群」は人間関係のストレスが少ないために「ストレスを感じない」と考えられる。

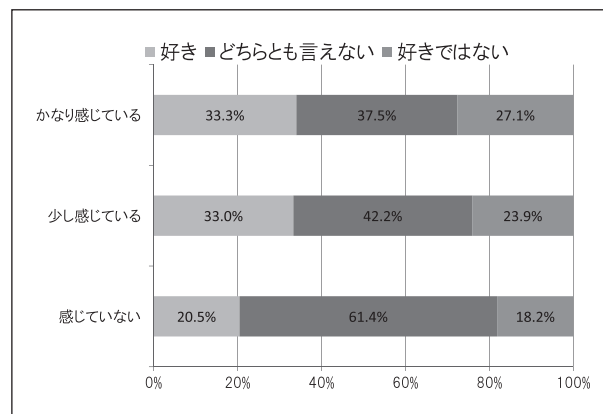


図3 ストレス感と酒類に対する嗜好との関係

6. ストレスと飲酒行動の関連

ストレス感と酒類に対する嗜好との関係 (図3)

ストレス感が強いほど「酒類が好き」と答えた例ならびに「好きではない」と答えた例が有意に ($p < 0.01$) 多かった。「どちらとも言えない」と答えたものはストレス感が低いほど多く、特に「ストレスがない群」の大半は「どちらとも言えない」と回答していた。また、「酒類が好きではない」としたものはストレスの度合いが高

くなるにつれて増加した。すなわち、「ストレスが多い群」では酒類が好きな人と好きではない人の両者がともに増えるという結果であった。アルコール耐性が低い対象者の場合、飲酒をストレス発散の方法として選ばないことがこうした対照的な二極化の原因であろう。また、ここには示さないが、ストレス感が強くなるほど「飲酒頻度が高い群」が増えるのに対し、「ストレスがない群」では「飲酒頻度が低い群」、特に「全く飲まない」が他の群よりも多くなっていた。

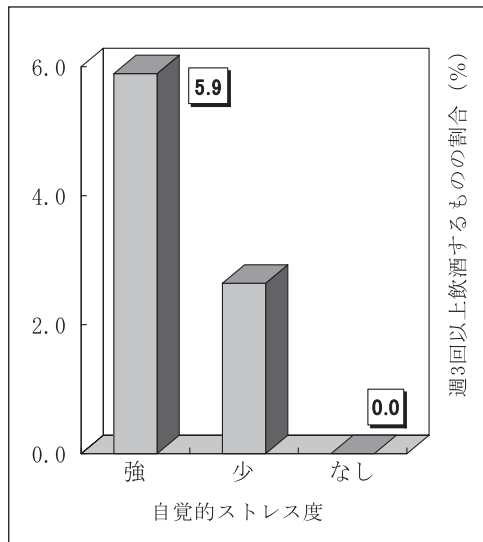


図4 ストレス感と飲酒頻度 (3回以上/週)

ストレス感と飲酒量頻度との関係 (図4)

自覚的ストレス度が高くなるにつれて「飲酒頻度が高い群」の中でも特に飲酒頻度の高い (週3回以上) 例が有意に ($p < 0.05$) 増加を示していた。ストレス度の低い群では飲酒頻度の高い群が少なくなり、特に「ストレスがない群」では週3回以上飲酒するものは皆無であった。

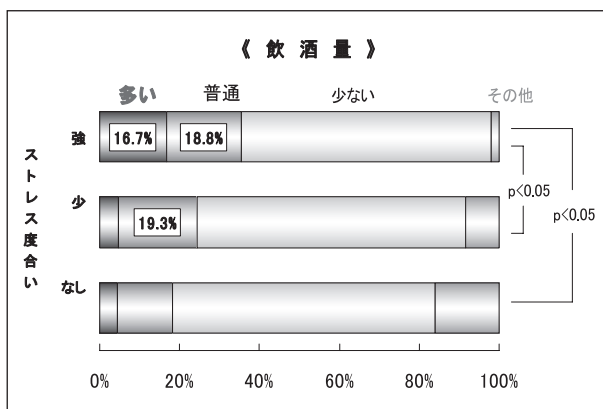


図5 ストレス感と飲酒量の関係

ストレス感と飲酒量との関係 (図5)

ストレス感が強くなるほど飲酒量が有意に多くなると

いう結果が得られた。ただし、この場合の「飲酒量が多い」は本人の「学生としては多い方だと思う」という自覚であり、絶対的な飲酒量を示しているわけではない。ストレスがない群では「少ない方だと思う」とその他(わからない)が多かった。ストレスがない群で「わからない」が多いのは、ストレス意識が極めて低いために、酒を飲む場合でもストレス発散のために飲酒をするという認識が希薄で、自らの飲酒行動への自覚が少ないことがその理由ではないかと推察される。

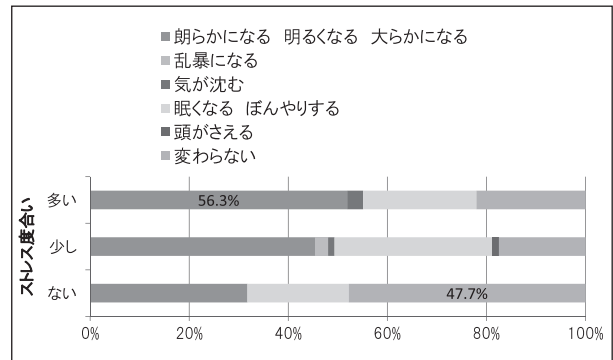


図6 ストレス感と飲酒による心身の変化

ストレス感と飲酒後の心身の変化 (図6)

自覚的ストレス度が高くなるにつれて飲酒後に「朗らかになる、明るくなる、大らかになる」などの気分を晴れやかにする様な変化が有意に ($p < 0.05$) 増大している。また、「気が沈む」、「気が大きくなる」の2つは「ストレスが多い群」のみに見られる回答であった。「乱暴になる」と「頭がさえる」は「ストレスが少ない群」にのみ見られた。「意識が薄らぐ」と答えた人はストレス感に関係なく、3群にほぼ同じ割合で現れていた。「眠くなる」は「ストレスが少ない群」に最も多く、「ストレスがない群」に一番少なかった。「ストレスがない群」は、その半数近くが「変わらない」であった。日頃感じているストレスの強さ、アルコール耐性の違いなどによって、このような差が生じたものと思われる。すなわち、飲酒行動を採ることでストレス発散を図る傾向の強い「ストレスが多い群」では「陽気で朗らかになる」などの変化がより強く現れるのに対し、「ストレスがない群」はそうした気分の変化を必ずしも求めないために「変わらない」が多いのではないかとと思われる。一方、「意識が薄らぐ」は典型的なアルコール不耐症状^{4,5)}で、体質的にアルコールに弱い人が、ある程度以上の飲酒をした場合に現れる。アルコール耐性とストレス感の多少はおそらく無関係であるため、アルコールに強い人も弱い人もほぼ同じ割合で3群に分布していると考えられる。

そのため、「意識が薄らぐ」は3群とも同じような割合で現れるのであろう。

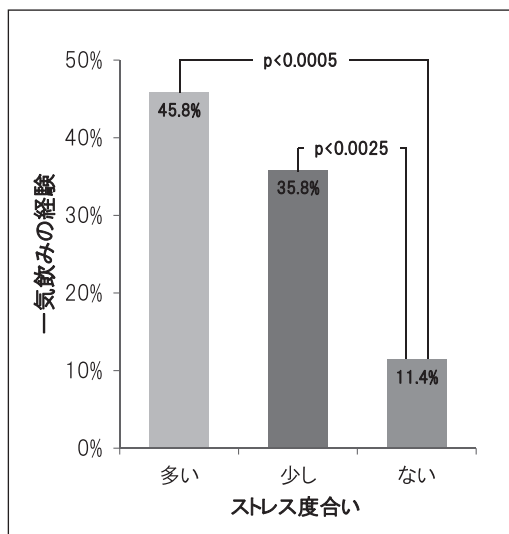


図7 一気飲みの経験とストレス感の関連

ストレス感と一気飲みの経験 (図7)

ストレス感と一気飲みの経験の間には明らかな有意差を伴う関連があり、「ストレスが多い群」では一気飲みの経験者が「ストレスがない群」の約4倍に達した。これは極めて危険であり、憂慮すべき事態である。

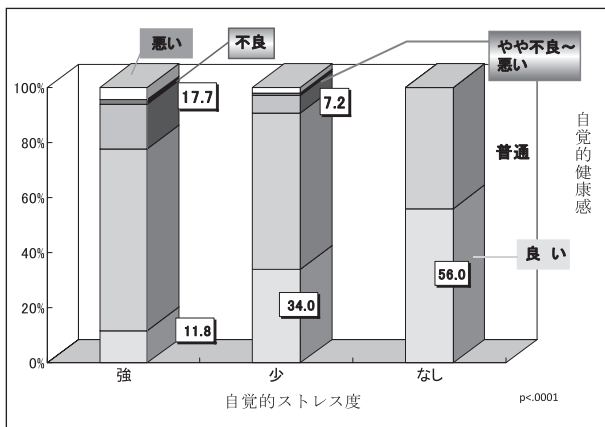


図8 ストレス感と自覚的健康感

ストレス感と自覚的健康度 (図8)

ストレスと自覚的健康度の間には密接な関連があり、自覚的健康度はストレス感が少なくなるほど「良い」が有意に (p<0.001) 増加するのに対し、「健康状態がやや不良、悪い」は自覚的ストレス度の高い群に同じく有意に多く見られた。「ストレスのない群」では「健康状態がやや不良、悪い」が全く見られなかった一方で「健康状態が良い」は「ストレスが強い群」の約5倍も存在した。

アルコール飲料 (酒類) は人類史上最も早くから社会的に容認されている嗜好品の一つである^{6,7)}。適切な飲酒がもたらす効果については、世の東西を問わず古来、伝えられており、近年の科学的な研究によって裏付けられたものも少なくない。現代社会において酒類は集団や社会における潤滑油としての機能を発揮しているといわれ、一日の疲れを癒し、ストレスを発散する手段ともなり、さらには生活習慣病の抑制効果、寿命の延長効果などについても数多くの報告⁸⁾がなされるに至っている。一方では不適切な飲酒行動のもたらす害^{8,9)}についても夥しい実例があり、人間の健康や家庭、社会に及ぼす影響も決して小さなものではない。

我々はこのように多様な面を持つアルコール飲料と、一般的には青年期前後から付き合いを持つ。今回の研究の対象者である女子大学生は正にその時期にあり、基本的な生活習慣の確立がなされる時期に、飲酒行動を含む適切な生活態度や心構えを持って暮らすことは将来の健康状態に重大な影響を及ぼすものと思われる。

今回の研究の対象となった女子大学生は、その多くが本格的な飲酒習慣を確立しているわけではなく、仲間との付き合いの場などにおいて「軽い気持ちで」飲酒をしている例が多いようである。これには巧妙化した酒のCM—若い女性を標的にした、ファッション性を強調し、アルコール飲料をあたかも清涼飲料水の一つであるかのように思わせる—と無関係ではないと思われる。今回の対象者には幸い、問題飲酒に至っている例は極少ないのであるが、ストレスを多く感じている学生ほど酒類への嗜好が強く、飲酒機会、飲酒頻度、そしておそらくは飲酒量も多いことが懸念される。ストレス発散の手段¹⁰⁾を飲酒のみに偏らせないような教育が積極的に必要とされよう。もう一つの懸念材料は、女子大学生達の飲み方である。酒の味を覚え始めたこの時期は、往々にして「酒を味わう楽しみ」よりも「酒に酔う楽しみ」の方を先に覚えてしまう傾向がある。アルコール飲料の種類、味の違い、食事との関連などは考えず、専ら酔った気分を求めるといった飲み方は基本的にアルコール依存症者の飲み方と変わらない。さらに、体質的に「酒に強い」女性はアルコール依存症や肝障害に陥る危険性が男性より高いこと、若い女性が月経前に大量飲酒し、深い酩酊感を繰り返し経験することが依存症への移行を早めること、胎児や生殖機能への影響があり得る⁵⁾こと、など女性の飲酒に関しては決して楽観を許さないものがある。

近年、若い世代を中心に女性の飲酒が急速に一般化しつつある。女性の社会進出や自己主張の強化に伴って、女性の飲酒に対する差別意識が薄れ、女性の飲酒機会を

増やす状況が整ってきたといえよう。特に若い世代においては、従来の男性中心型の日本的飲酒文化に対するとらわれが少なく、飲酒を生活活動の一部として積極的に取り入れている傾向が見られる。こうした風潮は飲酒に限らず喫煙、服装の選択などにも見ることができる⁵⁾。

ほとんどの男性にとってコミュニケーションの手段としての飲酒は一般的な行動形態（社交飲酒）であるが、女性の一部はこうした経験をほとんど持っていない。飲酒頻度の高い女性の飲酒場所は多くが家庭内であり、家族との団らんや自身の気晴らし、薬の代用品（眠るため、元気を出すため、など）といった自己充足性の高い飲み方をする例が見られる¹¹⁾。女性の中でも常勤の有職者は社交飲酒をはじめとする飲酒機会も多く、男性に近い飲酒者率を示す¹²⁾。

女性の飲酒行動は生活背景との関連が強いことが特徴であり、特に飲酒開始の動機や飲酒頻度の増加には就職、結婚、家庭不和などの要因が大きく関わっている¹³⁾。こうした特徴は社会における女性像と密接に関連しており、男性の場合とはかなり様相が異なるものである。これらにさらに女性の生理的、体質的な特徴等が加わって女性特有の複雑な問題飲酒行動が引き起こされると考えられる。現在、10代から20代の女性のアルコール依存症者が急増している¹⁴⁾。神経性食欲不振症や過食症などの食欲異常、自殺企図や盗癖などの問題行動を伴う例が多く、かつ進行が急速である例が少なくない。この場合も家庭や社会の中で自己像を確立する上での困難性、危機的状況が基礎にあるという¹⁴⁾。

大学時代は、将来の社会人としてのidentityの確立に向けて、様々な経験、学習を重ねていく時期である。大学は、適正飲酒に関する教育を含む、幅広い健康教育活動を通して彼らに働きかけをしていく義務がある。こうした活動が彼らの生活の基礎形成に然るべき好影響を及ぼし、問題飲酒などに陥ることなく飲酒に纏わる文化を享受し、豊かな未来への足がかりを確保していくことを期待したい。

参考文献

1. 青山莞爾：大学生の飲酒様態と集団の問題飲酒の指標、アルコール研究と薬物依存、17 (1)：51～73、1982
2. 青山莞爾、森忠繁 他：理科系大学生の飲酒様態、アルコール医学、16 (4)、95～96、1981
3. 水野敏明、大森正英 他：大学生の飲酒に関する研究、教育医学、33 (4)、191～197、1988
4. 大森正英：飲める人、飲めない人、保健の科学、34 (11)、785～789、1992
5. 大森正英：女性と飲酒、Health Sciences、13 (3)、138～143、1997
6. 佐藤信紘：アルコール医学・医療の今日的課題、医学の歩み、222 (9)、593～598、2007
7. 田中正敏：ストレスとアルコール、治療、87 (8)、2291～2296、2005
8. 大森正英：新版 健康管理概論、p.101～110、光生館（東京）、1996
9. 竹井謙之 他：アルコール医学・医療の最前線、医歯薬出版（東京）、2007
10. 石井裕正 他：特集 プライマリ・ケアのためのアルコールに関する知識、南山堂（東京）、2005
11. 重田洋介：キッチンドリンク、medicina、33 (9)、1766～1767、1996
12. 山川正信：女性の飲酒に関する疫学的研究（その1）女性の飲酒様態について、アルコール研究と薬物依存、23、316～331、1988
13. 比嘉千賀：最近の女性の飲酒様態とアルコール依存症の特徴、医学のあゆみ、154 (13)、993～997、1990
14. 山川正信：女性の飲酒に関する疫学的研究（その2）、意識およびライフサイクルについて、アルコール研究と薬物依存、24、11、1989
15. 国民健康・栄養の現状 一平成20年厚生労働省国民健康・栄養調査報告より一、健康・栄養情報研究会 編、第一出版（東京）、2012
16. 国民衛生の動向 2012 / 2013：厚生指針 59 (9)、2012